

編集後記

2011年3月11日、午後2時46分。

本誌第1巻刊行の直前、東日本大震災が発生した。生田キャンパスの校舎のダメージ・取り壊し、卒業式・入学式の会場変更、新年度の学事日程の変更、そして同一法人校である石巻専修大学の被災…。慌ただしく一年が過ぎ、2012年3月、どうにか本誌第2巻の刊行にたどり着いた。

今巻は柴田弘捷先生の定年退職記念号となる。先生は36年にわたって、専修大学の社会学を、社会文化コース、社会学コース、社会学専攻、社会学科として作り上げて来られたが(この過程は姉妹紙『専修社会学』No. 24に掲載予定)、この過程でご一緒する機会に恵まれた現スタッフの論考が、今巻には並ぶ。

第1巻が刊行されて、心理学篇、社会学篇を具に眺めてみると、両篇その仕上がりにわずかながらの異同が見出された。今巻、社会学篇においてはその微修正を行った。まず、各論文冒頭の「要旨」の配置デザインをわずかながら切り詰め、トップページ脚注箇所原稿の受稿日・受理日、執筆者プロフィールを記し、抜き刷りが作成される際に、その第1面に必要な情報が網羅されるようにした。裏表紙に記される英語の氏名・論文タイトルの配置デザインもわずかながら切り詰め、見栄えを調整した。そして今巻からは、心理学篇と社会学篇のISSNナンバーを個別に取得・登録することとなった。

これで本誌の外見的なスタイルはほぼ固まってきたのではないと思われる。そこで今号から次号に向けての課題としては、巻末に掲示してある投稿・執筆規則の改訂であろうと思われる。例えば、原稿の提出は電子記憶媒体とともにということになっているが、そこにはフロッピーディスクなる表記が残っている。また、原稿の表記は日本社会学会の『社会学評論』スタイルガイドによ

ることとなっているが、実は社会学は研究領域においてそのカバーする範囲が広く、古文書を扱うところから数理統計まで、その資料の表記法は隣接各学問分野の慣例に従うとすると、社会学評論スタイルで統一することはなかなか難しいという現状がある。本誌刊行前、すなわち、社会学が社会学専攻として文学部に属している時には、私たちは学部紀要『専修人文論集』に投稿しており、同論集は、文学部に所属する各スタッフのそれぞれの所属学会の執筆スタイルによる投稿を承認していたから、縦書きのものもあれば横書きのものもあり、注や文献挙示法もそれぞれであった。本誌は現状では、基本的には社会学評論スタイルに準拠するものの、細部においては投稿者の(所属する各研究領域の)執筆慣例を尊重することとしている。

さて、そして、実はこれが最も肝要な改訂項目ではないかと思われるが、それは査読体制の明文化、これが次号に向けての喫緊の検討課題となろう。現状は編集委員会で集稿、チェック、査読、修正を内部的に処理しているが、査読手順、評価基準等を表示して学術誌としての位置づけ・体制を明確にすることが必要となっている。これをどこまで厳密に、どのように進めるか、文学部社会学専攻の紀要『専修社会学』との連続性、本巻・社会学篇と心理学篇の学術誌としての位置づけの異同・あり方、これらを勘案して議論していくこととなろう。人間科学部が新設されて完成年度をむかえるまでには確定していきたいことがらである。

最後に、今号より専修大学出版局の担当者が代わり、M.E.さんとなった。上記のように慌ただしい学事日程において、誌面レイアウトの修正からはじまり、このように無事に柴田先生定年退職記念号をまとめ上げられたのもM.E.さんのご尽力によるところであります。深く感謝致します。(大矢根)